



紹介者

中川 誠一郎

中川ワイン  
代表取締役

光吉 敏郎

住友林業  
取締役 執行役員社長



## 過去から未来へ 森林と共に歩む

1691年の住友家による別子銅山の開坑とともに始まった銅の製錬に欠かせない薪炭や坑木用の木材を調達する「銅山備林」の経営が住友林業の源流です。19世紀後半には、長年にわたる過度な伐採と煙害で周辺の森林が荒廃の危機を迎えました。当時の別子支配人、伊庭貞剛は「国土報恩」の考えのもと、1894年に失われた森を再生させる「大造林計画」を実行に移します。多いときには年間250万本に達する大規模な植林を実施した結果、山々は次第に豊かな緑を取り戻していきました。この持続可能な森林経営は当社の事業活動の原点であり、植林・育林・伐採・再植林を計画的かつ継続的に実施する「保続林業」として今に受け継がれています。

現在では森林経営、木材建材の製造・流通、戸建住宅をはじめとした木造建築請負、不動産開発、バイオマス発電など「木」を軸とした事業をグローバルに展開しています。気候変動対策への取り組みが加速する中、森林や木材のCO<sub>2</sub>吸収・炭素固定機能が注目されています。また、森林を適切に管理・保全することは、生物多様性や生態系の維持保全にも寄与します。

昨年発表した長期ビジョン「Mission TREEING 2030」では、当社が事業活動の中心に据える「ウッドサイクル」を回すことで、森林のCO<sub>2</sub>吸収量を増やし、木造建築の普及により炭素を長期にわたり固定し、自社のみならず社会全体への脱炭素に貢献することを目指しています。その中で、国内外で保有・管理する森林面積を2030年までに50万haまで増やす目標を掲げています。

昨年12月にはインドネシア・カリマンタン島で約1万haのマングローブの森林を取得し、本事業を加えた森林面積は約29万haとなりました。マングローブが持つ自然資本価値を高め、ネイチャーベースドソリューション(NbS)を通じ、生物多様性と経済性を両立した森林経営を推進していきます。

登山が趣味である私にとっても森林は身近な存在で、学生時代から「日本百名山」のうち70座を制覇しました。まさに公私共に「森林」と歩む人生です。

▶▶ 次回リレートーク

三宅 孝之

ドリームインキュベータ  
取締役社長COO